

(3) 励まし合い高め合える生涯の友を

友人との関係は、楽しく、頼もしい。

一方で、私たちはしばしば、その関係に不満だったり、気まづくなったりする。

「友情は成長の遅い植物である。」

というのは初代米国大統領ジョージ・ワシントンの言葉だ。

そして、友情という名に値するようになるためには、幾度かの困難な打撃に耐えなければならない、と続く。

表面的な仲間関係にしがみついたり

無批判に相手に同調したり、

自分が傷つくことを恐れて心を開かない関係からは、

真の友情は生まれないだろう。

心から信頼できる友を得るために、

私たちはどうあるべきなのだろうか。



あなたにとって友達とは？

楽しいばかりでなく

周りのことを考えられる人

(中三・男子)

お互いに

思いやっけていける人 (中二・女子)

良きライバルでもあり

相談相手でもあり、信頼できる人

(中三・女子)

けんかもするけれど

何でも話せる人 (中一・男子)

宝物

友達がいなかったらすごく寂しい

(中一・女子)

● あなたにとって友達とはどんな存在か、考えてみよう。

● 友達のために何ができるか、考えてみよう。

見付けよう、友達の良さを

あなたのすぐ近くにいる
彼や彼女。
友達の「良さ」を
見つけてみよう。



誰もが
その人にしかない「良さ」を
もっている。

● 友達の良い所を書いてみよう。

● 家族や人生の先輩にそれぞれの考える友情について話を聞いてみよう。

正岡子規と夏目漱石

俳人として、また俳句や短歌の研究者として大きな業績を残した正岡子規と、我が国を代表する小説家・夏目漱石は、大学時代からの親友でした。二人が親しくなるきっかけは、共に好きな寄席の話題でした。漱石が英語教師として松山に赴任した際には、漱石の宿舍に子規が居候し、共に俳句づくりに没頭しました。

子規と漱石は日頃からしばしば手紙のやりとりをしていました。子規は、二十一歳の頃から病気がちとなり、次第に床に伏すことも多くなります。

明治三十三（一九〇〇）年に漱石がロンドンに留学する頃には、子規の病状はかなり悪くなっていました。留学した漱石は、病氣の子規を慰めるため、ロンドンの人々の様子や下宿先での生活についてユーモアを交えて手紙に書き、子規に送ります。子規はそれを喜び、「倫敦消息」として雑誌「ホトトギス」に掲載しました。

明治三十四（一九〇一）年十一月、病状の悪化に苦しむ子規は、ロンドンの漱石に手紙を書きます。僕はもう駄目になってしまった、毎日涙もなく号泣している、とつづり、ただ漱石がくれた手紙は非常に面白かった、君の手紙を見て西洋に行ったような気になって愉快でたまらない、もし書けるなら自分の目があるうちに今一便くれなにか、と頼みました。しかし、自らも体調を悪化させていた漱石は、更なる手紙を書くことができませんでした。

子規は、漱石の帰国を待たず、明治三十五（一九〇二）年に三十四歳で亡くなります。漱石の胸には深い悔恨が残ったことでしょう。漱石は、後に自らの出世作となった「吾輩は猫である」の序文で、子規への哀悼の気持ちを述べ、この作品を亡き友にささげています。



夏目漱石



正岡子規